

地域における映画活動の活性化に向けて

高崎映画祭運営委員会事務局長 茂木正男



はじめに

一九八七年の三月に初めて開催された高崎映画祭は、二〇〇一年の今年、一五回目の春を迎えることができました。飛ぶように過ぎ去った一五年という歳月をあらためて思い起こすと、様々な想いが凝縮され感慨深いものがあります。一九八〇年代後半には全国各地で映画祭が盛んに開催されるようになり、高崎市でも根強い活動を続けていた自主上映グループ「ムーヴェ」が呼びかけ団体となつて、高崎映画祭実行委員会を発足させました。当時は村おこし、町おこしを目的とした行政主体の映画祭が大勢を占めており、地方都市では、市民の映画ファンが主催し、全てをボランティアの手作りで運営するというスタイル自体が珍しかったた

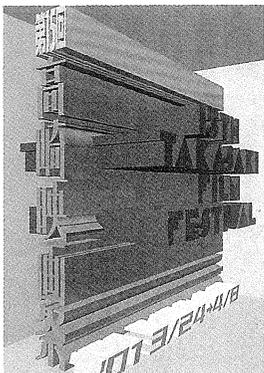
め、商店街や地元企業の方々、そして行政、報道関係者へと理解と支援の輪を広げ、多くの市民に支えられたことが現在まで続けることができた大きな要因であると思われれます。また、七日間、一九作品の上映を行った第一回から、一六日間、八一作品の上映で入場者数も三倍以上に伸びた第一四回まで、資金的な不安定さもさることながら専従のスタッフもいないという極めて異様な環境が、意外に私たちの気持ちを奮い立たせてくれたのではないのでしょうか。

映画祭の役割

映画生誕一〇〇年に沸いた一九九五年、初めての試みとして国内の映画祭における情報交換と交流を目的とした「全国映画祭ネットワーク会議」が高崎市で開催

され、活発な意見交換が行われました。(財)国際文化交流推進協会のお力添えをいただき、萩市、山形市と引き継がれ、再び高崎市で行われた昨年の会議では、これまでの成果として各地の映画祭情報を取りまとめインターネット上で公開することか決議され、山形国際ドキュメンタリー映画祭事務局と共に情報収集などの活動を担当することになりました。長引く不況の煽りを受け、最も安定していた行政主導の映画祭などにも陰りが見える昨今、映画興行界では都市部へと進出するシネマ・コンプレックスの著しい動きに再編を余儀なくされ、既存の映画館共々、私たち映画祭は、自分たちの置かれている立場や役割について、しっかりとした意識を持つべき時期にきているのではないかと思われれます。趣旨や主催団

映画芸術・メディア芸術の振興



第15回高崎映画祭国際カタログ



体は異なりますが、市民を巻き込み全国各地で独自の展開を見せている映画祭は、それぞれが地域に根付いた映像文化の振興を担っており、映画祭同士の繋がりを強化し興行とは異なるネットワークを築くことで、商業ベースに乗らない優れた作品を紹介したりと、お客様のみならず主催者もいつそう幅のある作品選択が可能になると思われれます。

地域での映画活動の活性化

高崎市は東京から一〇〇キロほどの通勤圏内ということもあり、地元の映画ファンは東京に映画鑑賞に出掛けることも少なくありません。

大都会に比べ、高崎市のような地方都市は自然環境や住宅事情では誇れるものがありますが、映像文化の観点からはい



パーティー会場
パンフレット売場
授賞式

ささが不自由を強いられています。地域で上映される大手配給会社の作品を除くと、ドキュメンタリー映画や独立プロダクションが制作した作品、また芸術性の強い作品や古典的な名作などは、どんな優れた映画であつてもほとんど上映されることはありません。地域でも日常的にこれらの作品を観られる環境を整備することが急務であり、これこそが映像文化振興の第一歩であると思えます。こうした現状を踏まえて、貴重な作品を低料金を鑑賞できる東京国立近代美術館フィルムセンターの巡回上映「優秀映画鑑賞会」などの重要性を再認識し、行政が地域の文化施設で主催する映画上映については、映像文化の真の豊かさを提供するという観点からあらためてその活動を見直す必要に迫られています。

近年、日本でも地域に映画撮影を誘致するフィルム・コミッション(FC)という新たな取り組みが始まっており、地域と映画の活性化に向けた起爆剤としてその試みに注目し、大いに期待したいと思います。